

町史編さんだより

第31回 ～『じげの宝』シリーズvol.19～

『出雲街道の宿場町として栄えた根雨』

地域の特徴や活動、行事、祭り、昔話、自慢などを紹介します。

商店、公共施設が集中した町の中心地

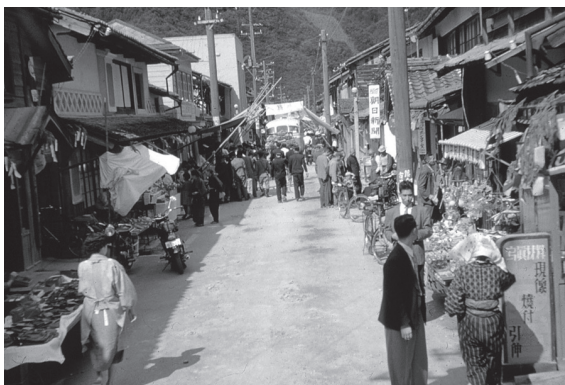
根雨は、古くは平安時代、長谷部信連が小京都に見立てて築いたとも伝えられ、江戸時代、松江藩の殿様が参勤交代で通った「出雲街道」の宿場町として栄えたまちです。

日野川の右岸にあり、対岸には野田、舟場が見えます。川沿いに国道181号（183号重複）や180号が通過し、北側にはJR伯備線も走るなど、山陰・山陽を結ぶ交通の要衝としても知られています。

まちは、西側の国道と東側の山の間に、南北帯状に約700m延びています。そのなかには、役場、文化



▲浪人踊りを楽しむ根雨1区盆踊り（昭和58年）



▲鳥取県畜産品評会に合わせた市が開かれ、にぎわう根雨の本通り（昭和30年）

前半年まで宮相撲が行われていました。少し登った場所には観音堂もあり、お参りする姿もあつたといえます。旧根雨中学校グラウンドでは、昭和50年代まで盆踊りが行われ、浪人踊りを楽しみました。

センター、図書館をはじめ、特急電車の止まる根雨駅、県の出先機関（日野振興センター）、ハローワーク、商工会、郵便局、銀行、事業所、商店などがあります。以前は、国の出先機関なども多く、家畜市場などもありました。国道沿いには、日野

高校やドライブイン、商業施設などが並び、近年、複合施設「金持テラスひの」もできました。まちの上手を流れる板井原川沿いには、介護老人保健施設や特別養護老人ホームなどの介護施設が整備されています。

また、まちの中ほどには、本陣の門、町歴史民俗資料館、近藤家住宅、根雨神社、祇園橋、旧山陰合根雨支店など歴史的な建造物がある。

り、まちなみは宿場町の風情がしのべれます。秋から春先にかけてオシドリの飛来地として知られ、日野川にかかるJRの鉄橋付近には観察小屋や資料館があり、シーズン中にぎわいます。

昔は映画館や鍛冶屋、紺屋なども。牛市で大にぎわい

まちなかには、板井原川や水路が巡り、清らかな流れと、せせらぎの音が絶えません。かつては水路沿いの池にコイを飼っている家も多くみられました。黒ゴイは、祭りなど来客があれば、料理してふるまうといえます。

上町と呼ばれるまちなかの側では、山手に天神さんのほこらがあり、昭和40年代

た。

まちなかには、昭和年代、牛市や大歳市でのにぎわいが印象的だったとの話。牛市は12月に2週間続き、牛を買いに来た人で旅館はいっぱいに。また農具をはじめ、ゲタやおもちやなど、さまざまなお店が並び、町の人や農家の人たちがごった返しました。

また、通り沿いには多くの商店が連なり、映画館をはじめ、鍛冶屋、紺屋、ゲタ屋、カクテルバー、風呂屋、パチンコ店などもあつた時代も。夏には、アイスキャンデーを作って売る店が繁盛し、その味が忘れられないといえます。年末には、まちなかで餅をつく姿も見られました。

7月のねう祭りでは、自治会や各種団体の踊りと花火、10月の秋祭りには、神輿が出てにぎわい、まちなかの風物詩となっています。

「かわら版」づくりなどの自治会活動も

根雨のまちなかには、南側から東西の線で分けるように、根雨1区から6区までの6自治会があります。

特色ある自治会活動を見ると、平成元年、根雨1区では、若者が中心になって活

気ある区をつくろうと「ほたる会」を発足。ホタルの飼育や、花いっぱい運動などを手がけたほか、ねう祭りでは毎年、手作りの水車や噴水などの休憩所を作り演芸団体を歓迎、板井原川での魚つかみ大会は20年以上続いています。

3区では、昭和62年から平成23年まで、毎月自治会新聞「根雨3区かわら版」を発行(253号まで)。身近な地域の話題や歴史、町政批判なども掲載し、小骨のきいた新聞としても有名でした。6区は、昭和58年に「ねう六区音頭」という踊りを創作し、ねう祭りで踊ったといえます。

古い街並みと人情味が魅力

1区から6区までの人口世帯合計を見ると、昭和35年に508世帯、2052人が、平成27年には279世帯、727人と、人口は約3分の1に減少。この間、国などの

公共機関や事業所、商店の撤退、廃業も進んでいます。

そんな中、「昔の面影が残るまちを探す旅行者にとって、根雨はとても雰囲気の良いところと聞く。もっと売り出したい」「通りに面した部分だけでも、出雲街道の風情を感じる町並みを再現したい」「川や水路などの清流を生かすとともに、空き家などを宿泊施設に活用したい」など、まちなみを生かした地域づくりへの意見があがりま

また、「根雨のまちには、歩いて行ける範囲に商店や学校、病院などがあり、飲食店も多く、とても便利で暮らしやすい」「すれ違う人や知らない人にも自然とあいさつを交わし、声をかけあう人情味のあるまち」と、まちの魅力が語られました。(松田暢子||政治・行政・教育小委員会)



▲根雨の水路を使ったアユのつかみ取り大会(平成23年)

日野町史編さん室 (TEL 72-0341)



江戸時代にたたら技術を記した鉄山必要記事によると、たたら場の適地は「小鉄七里に炭三里」とされ、砂鉄と炭が近く

文=伯者国たたら頭彰会
副会長 佐々木幸人

第8回
『山内集落』
たたらマイスターが、あなたを奥目野たたらの世界に引き込みます。

の村の跡が、今もあちこちに点在している。山内で働く労働者は、前もって米や住居など生活物資を提供されて、その代わりに労働したのだが、仕事はきつく、前払いの賃金を持ち逃げする者もいた。たたら場では逃げた者を追捕する権限が与えられていたので、これをもつてたたらは奴隷的な扱いがあったとされる見解もある。また、たたら場では博打や喧嘩、盗みはきつく禁じられていたが、だからと言って

で手に入るところが良いと書かれている。鉄山師はその条件を満たした山の中に山内と呼ばれる村を作り、集団生活をさせながら鉄を作った。そして、その村周辺で炭となる木を伐りつくすと引越した。そのため、ひとつの山内が30年ほどのスパンで移動を繰り返すことになる。奥

日野の山中にはこの村の跡が、今もあちこちに点在している。

飲酒や食事まで制限されていた訳ではないようだ。大規模な山内には、人々が暮らす小割り長屋や事務所となる本小屋、砂鉄洗い場、鉄を冷やす鉄池、鉄を割る銅場、鍛冶屋、製鉄の神を祭った金屋子神社、製鉄炉のある高殿などの建物があった。

高殿でたたらをする技術長は村下と呼ばれ、ナンバー2を炭坂と呼んだ。さらに天秤ふいごと呼ばれる送風機を踏む番子、粘土を作る人や炭を用意する人などがいた。この様子はたたら楽校に模様があつて見学することが出来る。

不純物の混じる鉄を綺麗な鉄材に加工する鍛冶場には、大工と呼ばれる職長を中心にして槌を打つ手子が何人かいた。この仕事もかなり重労働だったようだ。そのほかにも銅場の担当や炭を作る山配や山子、全体を取り仕切る手代や親方など職制は細かく分かれていて、たたらは多くの人手を必要とする産業だった。